

日本で苦しむ外国人の存在を あなたはどれだけ知っていますか？

～九州で国際の狭間に置かれる人々に寄り添う～

2020年度活動報告書



国際法教育プロジェクト・KARDIANOIA

西南学院大学教育支援プログラム (C) "Seinan Millennial Project"

目次

1. 入管問題についての講演会

2. 体験シミュレーション

3. UNHCR 職務経験者による
講演会

4. 感想

1. 入管問題についての 講演会

.....

観光、仕事、留学・・・ 夢をもって日本を訪れる外国人がいます。

新型コロナウイルスの影響で激減しましたが、1年ほど前まで日本には多くの外国人が訪れていました。その目的は様々だったにせよ、多くの人が「旅行を楽しみたい」「母国よりも良い暮らしがしたい」など希望をもっていたでしょう。そしてその中には、家族の命を守るため、生活を守るためにやってくる人もいます。

例えば難民性の高い人々。彼らは母国で紛争に遭い、命からがら逃げ出して、やっとの思いで日本にたどり着きます。しかし日本で難民として受け入れられる人は0.4%しかいません。

また、最低賃金より遥かに低い賃金など、違法な労働環境で働かされ、辛い環境から逃れるためにやむなく実習先を逃げだす技能実習生もいます。

そんな彼らは違法滞在とみなされ、入国管理センターに収容されてしまいます。入国管理センターには、他にもいろいろな背景をもった外国人がいます。日本に家族がいる、母国に帰ると命の危険がある、多額の借金をしてしまった・・・様々な理由で母国に帰りたくても帰れない人もいます。

それらの事情があるにもかかわらず、帰国を迫られ、入国管理センターにとどまらざるを得ない人はどうなるのか考えたことはありますか。

日本では収容者の6ヶ月以上の長期収容や人権に配慮されない環境が問題となっています。長期収容されている人の中には、自由を奪われる生活に絶望し、自殺未遂を繰り返す人、ハンガーストライキの末に亡くなってしまう人がいます。

今回、私たちがとったアンケートで、イベント参加前に難民問題について知っていた人は66.7%、入管問題について知っていた人は22%でした。



入管・難民問題

2020年12月5日（土）

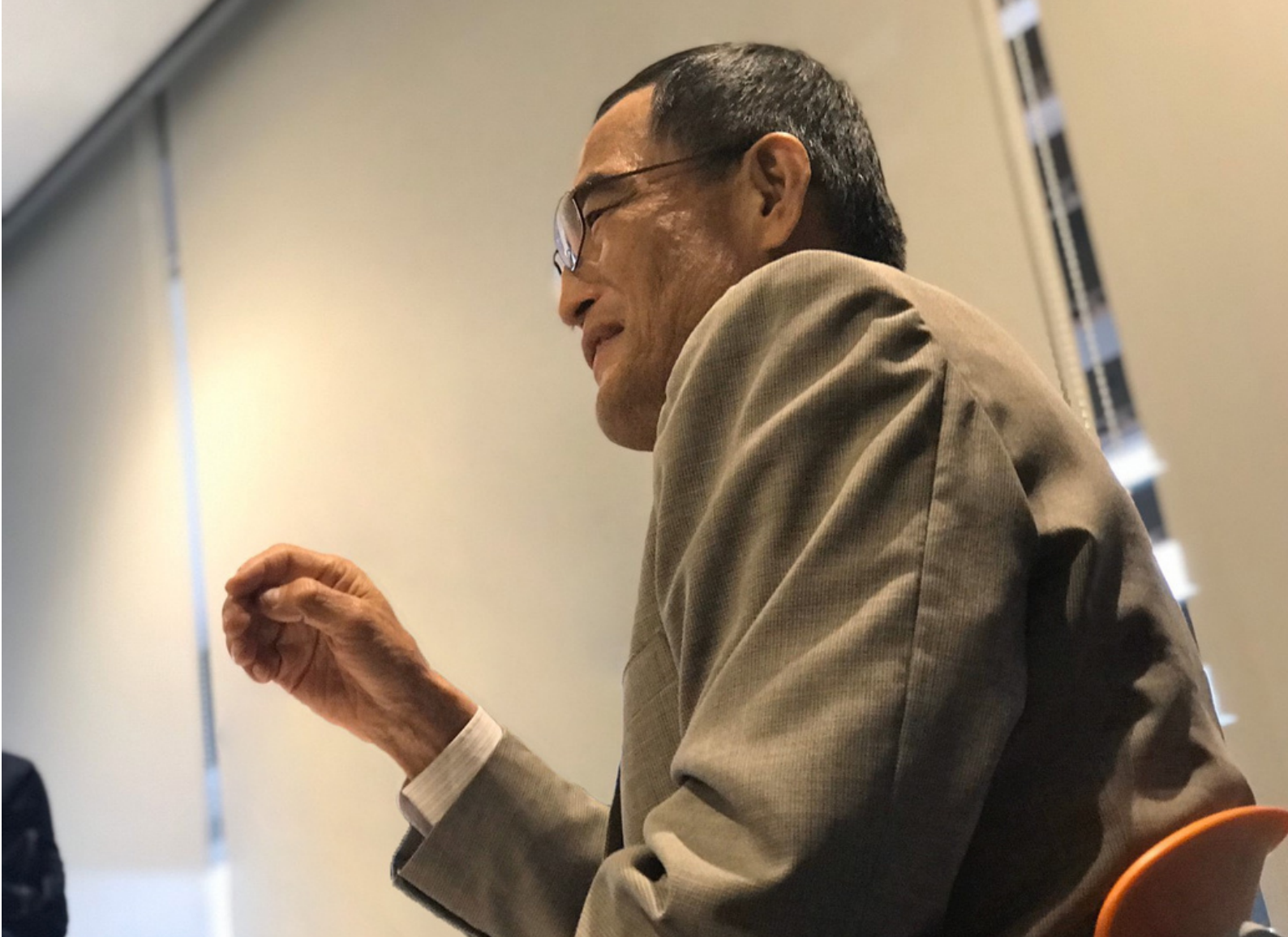
オンラインにて

第1部 竹内 正宣 先生

面会活動を通じた支援について

第2部 稲森 幸一 先生

難民弁護実務について



第1部

竹内正宣先生 (行政書士)

竹内先生からは、難民に関する基礎的な知識と面会ボランティアを通じた支援についてお話していただきました。

そもそも難民とはどういった方なのか、どのような理由で収容されているかという基礎的な知識から、入管収容施設内での処遇といった詳しいところまで説明していただきました。

収容されている方が抱えている不安や、入管に対する要請など、面会ボランティアとして被収容者の方に寄り添われている竹内先生だからこそお伝えできる被収容者の方のリアルを教えてくださいました。



第2部

稲森幸一先生 (弁護士)

稲森先生からは、日本の法的な観点から入管問題についてお話していただきました。入管内でのハンガーストライキ、仮放免の現状や、この問題に対する国の主張、国際社会から見ても日本は様々な勧告を受けていることをお話していただきました。

ハンガーストライキをしたら仮放免中の出頭頻度が増えること、長期収容によって肉体的・精神的被害が出て医療にかかりづらい状況にあること、難民認定率の低さなど、外国人が置かれている厳しい状況について、リアルな映像と共にお伝えしていただきました。

・ 実際に出た Q & A

Q. 私たちが入管問題についてできることはありますか？

A. 〈竹内先生〉テレホンカード（KDDI専用）の差入れができます。
〈稲森先生〉仮放免の際に支払う保証金のクラウドファンディングを行っています。

Q. 難民の人は日本の難民に対する対応についてどう思っているのですか？

A. 〈竹内先生〉難民性が高い人ほど日本の対応に絶望しています。
〈稲森先生〉母国で家を燃やされても証拠がなく、日本の認定方法は厳しすぎる
と感じています。

Q. コロナによる影響はありますか？

A. 〈竹内先生〉1部屋に4～5人 収容されており、1 ブロック20人以上いるため、施設内で集団感染するリスクを考慮し仮放免をしています。
〈稲森先生〉入管に何でもかんでも収容するという状況の転換期になるのではと期待しています。

講演会

参加者からの声



自分の知らない問題について理解を深めることが出来たのと同時にこのような問題を考える際に感情論だけでおし進めてはいけないということも学べ大変有意義な時間でした。（大学生、男性）

普段は法律を専攻していないので、分からない点もありましたが大変考えさせられた時間でした。また、起きている問題に対してただ可哀そうだけで済みますのではなく、問題解決のためにしっかり向き合い考えていかなければいけないと思いました。（大学生、女性）

日本は移民に対しての扱いが酷いとは知っていましたが、そもそも難民に認定すらされないを知り、驚きました。世論が動かなければ国は動かないと思うので、少しでも多くの人がこの問題について知ることが大切だと思いました。（高校生、男性）

日本でこのような難民問題、入管問題があることを知りませんでした。苦しんでいる方々に目を向け、手をさしのべることや問題を根本から解決することが必要だと思いました。私は小学校教諭を目指しているので、未来を担う子ども達にこの講演会で学んだことを伝えられたらいいと思います。素晴らしい講演会をありがとうございました。（高校生、女性）

入管問題には多様な課題があるのだと感じました。不当に拘束されている方々の人権が少しでも尊重される体制になるよう願っています。（社会人、男性）

2. 体験シミュレーション

.....

■ 概要

UNHCR (国連難民高等弁務官事務所)が開発した、戦争や迫害から逃れ、避難生活を余儀なくされる人々が直面する様々な問題を疑似体験するプログラムPassage(難民体験シミュレーション)に入管体験シミュレーションを併合した本団体独自のプログラムです。本年度はコロナウイルスの影響によりオンラインでの開催になったため、オンラインでも参加可能な形に改良し、実施しました。難民シミュレーションの準備には本学のキリスト教活動支援課にもご協力を賜りました。

また、本シミュレーションではKARDIANOIAのテーマである「人の痛みを知る、人の心に寄り添う」により焦点を当てるため、以下の取り組みを行いました。

【人の痛みを知る】

難民シミュレーションでは、参加者自身が難民となり自国から逃れ難民申請を出すまでの流れを体験して頂くことで、ニュースで聞くだけでは感じることはできない当事者として苦しむ「人」の痛みを知って頂きました。

【人の心に寄り添う】

入管シミュレーションでは、別日の講演会でご講演を賜った竹内先生にご協力いただき、面会で相手に寄り添った質問のコツをまとめた配付資料を作成しました。何気なく聞いたことが相手を傷つけてしまう可能性のある中で、どのような言葉を選び聞けばよいのか難しいながらも誠実に取り組んで頂くことができました。

・ 難 民 シ ミ ュ レ ー シ ョ ン

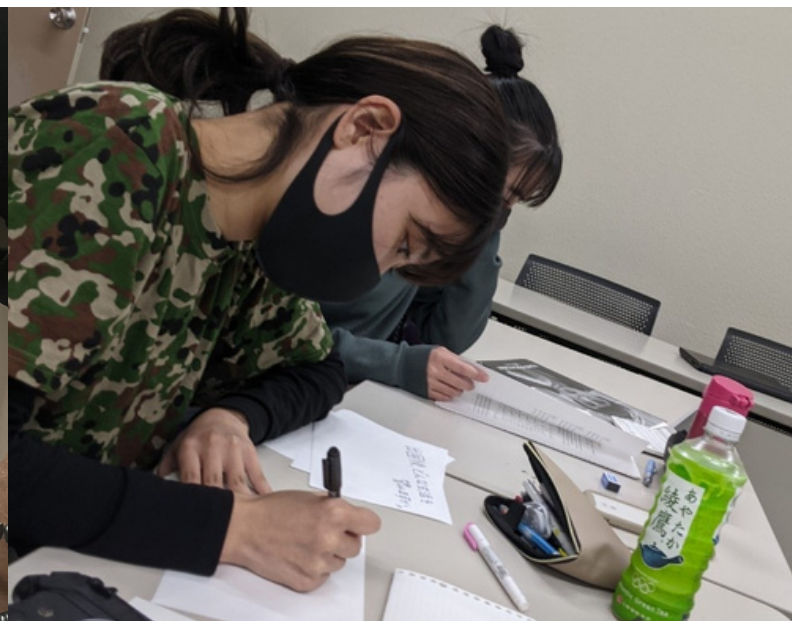
迫害から逃れるため、必死の思いで他国に庇護を求める難民の方々の心情を体験するシミュレーションです。

UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)のシミュレーションをオンライン版に独自に改良しました。

「家族と共に平和に暮らしたい」

「自由に生きたい」

このような希望を持って命からがら母国を逃れた難民が、日本の入国管理局で打ちのめされる現実を参加者の方々に感じてもらいました。



・ 入 管 シ ミ ュ レ シ ョ ン

入国者収容所の被収容者と面会を行うという設定で被収容者に扮した学生に対して質問をするシミュレーションを行いました。

「在留資格はないけど日本にいたい理由がある」
「今はただ家族に会いたい、それだけ」

様々な思いに苦しむ「人」の声を聴いていただきました。

本年度はコロナウイルスの影響により模擬入管メンバーが入管施設へ面会に行くことができなかったため、被収容者役として昨年実際に面会へ行かれた経験のある根岸ゼミの古本翼さん（法学部国際関係法学科4年）、井上凜太郎さん（法学部国際関係法学科3年）にご協力を賜りました。



・ 実 際 に 出 た Q & A

Q. 日本に来ようと思ったのはどうしてですか？

A. 住んでいる国が貧しく、家族を養っていくためのお金がありませんでした。そのため、文化的にも技術的にも進んで安全と言われている日本に来て家族を養うだけのお金を稼ぐために来ました。

Q. 今施設の中でつらいなと思うことはありますか？

A. 自分が信仰している宗教がほかの同じ部屋の人たちと違うことです。同じ宗教を信仰している人たちは固まって行動していますが、自分は違う宗教なのでいつも一人で、悩みを相談したくても、話し相手がいなくて…

Q. 今外国にいる家族とは連絡はとれていますか？

A. 施設内にいるのでとる方法がないですし、相談できる友達もいません。早く家族の声が聞きたい一心です。

3. U N H C R 職 務 経 験 者 に よ る 講 演 会

.....

UNICEFウガンダ事務所や国内外のNGOを経た後、
UNHCR職員としてタンザニア、ヨルダン、
バングラディシュにて、難民保護に従事。
2020年9月より笹川平和財団に研究員として在籍。



小宮理奈さん

・ 講演会概要

「自分が相手より強い立場にある、相手にとって自分は相手や相手の家族の生活を左右するという点で権力に差があるということを意識している。」

UNHCR職員として難民保護に従事されたご経験のある小宮理奈さんに

「UNHCRの活動や難民保護の流れ」
「避難を余儀なくされている人々の現状」
「難民支援業界のホットイシューを知る」

上記をテーマに現在の難民の人数や、難民に対する各国の動き、そしてUNHCRがどのように難民の保護を行っているのかという詳しい情報に加え、問題をクリティカルに考える重要性についてご講演をいただきました。講演会後の質疑応答の際に、「難民保護活動を行う上で気をつけていることは何か。」という質問に対しては、職員としてより難民に近い存在であった小宮先生が相手と接する上で何意識していたのかという点について、詳しくお話しいただきました。

シミュレーション・講演会 参加者からの声



国境を越え入国することがこんなにも命懸けであるということを今回のシミュレーションを通して初めて知りました。また、難民役の方に質問してみるという体験もでき、多くのことを学びました。安全な日本という国に逃げてきた人々につらくあたったり、苦しい思いをさせるのではなく、募金活動を行い難民の方々の助けとなるなど、寄り添うことが大切だと思いました。（高校生、女性）

なかなか安心ができない中、ようやく受け入れて貰えるかと思っても、理解できない言語で書かれた申請書を見たときの絶望感から、実際の難民の方々の苦労は耐え難いものだろうと考えることができた。（大学生、女性）

今は自分たちで簡単に情報を発信できる状況なので、もっとこういう事実を知って知識をつけてから自分でみんなに情報を発信出来ればいいと思った。（高校生、女性）

難民問題についてまったく知らない状態からシミュレーションに参加させて頂き、難民として生きることの不安や困難・苦しみをリアルに感じる事ができ胸が痛くなりました。入管シミュレーションでも、お話を聞くなか思ったのは、日本は平和で設備も整ってて良い国だと私自身も思っていたのに、そのようなイメージをもった人が難民として来ても「良い国」ではないのだな、ということです。日本は難民問題への意識がほとんどなく毎日暮らしていると思いますし、だから私も今までこのような問題があるとは知りませんでした。もっと自国の問題点や改善点について自国民として責任をもって学び、行動していかなければいけないと感じました。（大学生、女性）

シミュレーションで実際に体験してみることで、難民の人達が命懸けで自国を離れていること、日本へ難民申請しても全然認めて貰えないこと、また収容所で生活する人々のことを知りました。頭では分かっていたこともその気持ちになってみるとすべてが衝撃的でした。（高校生、女性）

4. 感想



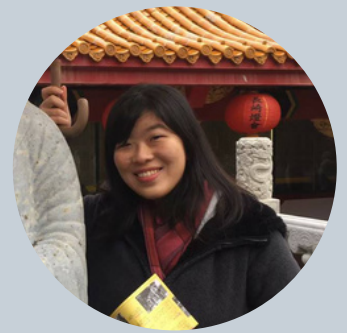
・ KARDIANOIA 参加メンバー

知ってしまったら無知の状態には戻れません。そして、「相手のことを知る」ということには、「知った相手に寄り添う」という責任が伴ってくると私は考えます。このプロジェクトに参加する前に少し躊躇したのは、国際法という畑違いの分野だったことに加え、そのこともあったかもしれません。

本当に「相手に寄り添う」とはどういうことか、改めて考えたのは入管訪問前の準備だったと思います。個人情報取り扱いについての話、実際に入管内で起こっていることの話聞き、その嚴重さや深刻さに改めて身が引き締まりました。同時に、自分が入管訪問することでできることは果たして何だろうか、楽しい学生生活を送っている自分が行く意義は何だろうと思った時期もありました。日本側の考えと外国で起きていることを知れば知るほど、この問題はどこまで行っても平行線で解決策がないような気もしてしまいました。

結局入管訪問自体も中止になり、コロナ禍で対面での活動も叶わず、やきもきした時期もありましたが、みんなで話し合っていく中で「入管訪問をしていない私たちの寄り添い方」を考え、実行に移すことができました。私一人だったら、「直接的に関われないなら、もう何をしても無駄だ」と投げ出したくなっていたかもしれません。本当にメンバーには感謝しています。

活動は一段落しましたが、入管問題はまだ続きます。他の社会問題もまだ見えないところに沢山あると思います。これからもアンテナを張り巡らし、考え続けたいです。



人間科学部
心理学科3年
喜安 花央里



法学部

国際関係法学科3年

房村 佑希与

高校生の頃に難民女性の人権に関するニュースを見て衝撃を受けたことが、難民問題に関心を持ったきっかけでした。難民や入管について詳しく学ぶ前は、このような酷い現状を改善すべきだ！と憤りに身を任せ、感情論でこの問題と向き合っていました。しかし、このプログラムを通しインプットとアウトプットを重ねるうちに、入管・被収容者・国民といった様々な視点から多角的に物事を捉える大切さに気付かされました。一部分を見て、それだけを信じ批難するのではなくその背景にも目を向けることが重要であるということ学びました。

コロナウイルスの影響により様々な変更を余儀なくされ、多くの制約を伴いながらの活動でしたが、学びを止めないために、約一年間この問題に向き合ってきました。

寄り添うとは何か。ただそれっぽい言葉を並べるのではなく、一つひとつの言葉の意味を意識し取り組んだことで、深い学びに繋がったと感じています。

私たちの取り組みは、直接的に誰かを救えるものではありません。しかし、より多くの人にこの現状をお伝えすることが、この問題に苦しんでいる方々に対して私たちにできる一つの「寄り添い」のかたちであると思います。

コロナ流行の少し前にフィリピンを訪れた際、フィリピン人の友人達は、私に日本の良いところを沢山話してくれました。首都部の高速道路建設を日本が援助している事。外国人労働者の受け入れが多い日本に出稼ぎに行く事で、フィリピンの経済状況が良くなる事。皆口を揃えて「日本はいい国」と言う事に対し、誇らしく思っていた自分を恥ずかしいと感じたのは1ヶ月後、「入管問題」を知った時でした。

“日本は平和” “日本は良い国” という思いが強いのか、日本人は「国際問題」という言葉を聞いて海外情勢に目を向ける人が多いです。“日本が国際的に非難されている問題”を例に挙げる人は少ないでしょう。「外国人を裏切る日本」と言う側面を知らずに「フィリピン人を助ける日本」ばかりを誇らしく思っていた私自身も同じです。私はこの「自国に目を向けない」状況こそが日本の国際問題である入管問題が解決しない原因だと考えます。

日本は世界に誇ることでできる国際支援活動を多く行っています。その反面、非難される国際問題も抱えています。自分の国が何をしているのか、良い面も悪い面も両方に向き合う。この事が今後自分が“日本人として恥ずかしくない国際支援活動”を行う上で大切な事だと学びました。

この報告書が国際支援に興味を持つ方にとっても「自国に向き合うきっかけ」になる事を願います。



文学部外国語学科
フランス語専攻2年
矢嶋 優奈

「どうすれば誰も死なずに済みますか」

私はこの言葉を本プログラムの紹介資料で見たときに衝撃を受けました。そして何が原因でどういう人がどんな風にしてこのような思いを抱かなくてはならないのか、ということを知る義務があると思いました。それまでは“難民”“入管問題”に関して表面的な言葉としての理解しかなく、その現状やその立場に置かれる人々の心境など全くと言っていいほど無知でした。このプログラムを通して、日本の制度の陰で苦しんでいる人々が実際に置かれている状況やその心の声、痛みを学びました。そして何より「人の心に寄り添う」ということの難しさを痛感しました。言葉では簡単に言えることです、人の心に、人の痛みに寄り添うということは誰にでもできることではありません。

この「寄り添う」ということについて私たちは何度も話し合いを続けてきました。そして、自分たちが生活するこの日本という国で苦しんでいる外国人の存在とその問題について知ってもらい、関心を持ってもらうことで、無知による誹謗中傷が少しでも軽減され最終的にはそれが「人の心に寄り添う」ということではないのかという結論に到達しました。私たちがこのプログラムを通して体現しようとした「人の心に寄り添う」ということ。そしてこのプログラムをきっかけに関心を持ってくれた人々がいるということ。この“難民” “入管問題” という大きな問題を前に、私たちができるのは限りある事かもしれませんが、その小さな一つ一つが誰かの心の救済に繋がっていることを願っています。



法学部
法律学科1年
出利葉 由麻

西南学院大学に入学した4月、私は自分が入管問題に関して学びを深めることになるとは思っていませんでした。日本に入管問題という問題があること自体を知らなかったからです。このプログラムの案内を見た時に初めて入管問題、そして国際の狭間に置かれる人々の存在を知りました。

衝撃を受けたことは、国際の狭間に置かれる人々が自分の身近な場所にいるということです。福岡から2時間弱の場所に入管センターがあるのに、なぜ今までその存在を知らなかったのだろう、と自分の見てきた世界がいかに狭く、少ない情報によって構成されていたかを痛感しました。

約1年間、この問題について学び、考えてきましたが、知れば知るほど外国の方々を救いたいという思いとは裏腹にこの問題が容易に解決するものではないということを実感しました。今の自分にできることはとても少ない。ただ、この問題に関して無知であれば何も変わらないという思いで、私たちはこの問題や情報をより多くの人に知ってもらうために講演会やシミュレーションの企画を行ってきました。この1年で学んだことは、まだほんの一部かもしれませんが、国際の狭間に置かれながらも懸命に生きる方々の存在を学べたことは貴重な経験となりました。ご協力いただいた多くの方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。



法学部
国際関係法学科1年
萩原 千乃



国際文化学部
国際文化学科1年
竹光 康紘

このプログラムに参加するまで、入管問題は報道で接するだけのものであり、「日本はなぜ難民を受け入れないのだろう」という疑問や「外国人の方々に冷たい」というイメージを漠然と抱いていました。活動を通して、日本ではなかなか難民として認められない現状や入国者収容所の環境を詳しく学び、何とかこの状況を変えたいという思いが強くなりました。その一方で、問題の背景を学ぶと、容易には状況を改善できない事情もありました。

私1人が入管問題に対してできることは、本当に小さな事です。しかし、広くこの問題が知られるようになり、社会全体がこの問題に向き合うようになれば、解決に向かえるはずですし、そうしなければならないと思います。これからも入管問題と向き合っていくとともに、多くの人に入管問題を伝えていくことで、問題の解決につなげていきたいと考えています。

前期から参加させていただいたKARDIANOIAで入管・外交・戦争・難民といった様々な場면을模擬的に体験することで、実践的に獲得することができます。様々な問題についての発表内容を考えるうえで、難民問題、入管問題の法的側面だけでなく政治的・経済的側面などについても調べていくうちに、さらに新型コロナウイルスの中で自分がいかに国々、特に日本の状況について知らなかったか、そして、そもそも関心がなかったのか痛感しました。実際の人権問題に向き合うことで、目に見えない問題に新たな視点と問題意識を持つことができました。



法学部
国際関係法学科1年
シトゥメアン・ハルン・サムエル



法学部
国際関係法学科1年
久光耀子

このプログラムに参加することを決めた5月、私は入管問題について入管センターの存在も知らないほど無知の状態に参加しました。それまで、国際的な人権問題とは何かといわれれば海外で起きている問題ばかりで日本にはないだろうと思っており、日本にも国籍の違いによってひどい扱いを受け苦しんでいる人がいるのだと知った時、驚いたと同時にとても恥ずかしくなりました。同じ九州という狭いエリアに人としての権利を訴えるべく命を懸けてまで訴える人がいるにも関わらず、私は訴えに気付くことができなかったのです。自分がいかに周囲の問題に対して無関心であったかを痛感しました。

また、プログラムを進める上で本プログラムのテーマの一つである「人の心に寄り添う」について考えることが難しかったです。入管問題を根本から解決するには問題があまりにも複雑で、被収容者の方とお話するには相手の苦しみを理解し、受け止める覚悟と信頼が必要であり、この問題に対し私たちはあまりに無力で、大きな変化をもたらすことはできませんでした。しかし、そのような中でも講師の先生方をはじめ大学の関係者の方々や先輩方に助けられながら、私たちの考える最大の「寄り添う」活動である入管問題の認知度を上げるための講演会の実施やシミュレーションを行うことができました。コロナ禍によりできないこともたくさんありましたが、オンラインでの実施によって県外からも参加して頂けたことはコロナ禍の今だからこそその収穫であったと思います。

何もできない中で何ができるのか、心に寄り添うとは何なのか、みんなで考え実行することで、ただ知識をつけるだけでなく人としての成長を感じることができました。本プログラムにご協力くださったすべての皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

高校生のうちに何か学ぶことはできないかと思い9月からKARDIANOIAに参加しました。参加したものの全くと言っていいほど難民や入管問題について知らず無知の状態でした。学ぶ中で私たちが住んでいる日本の表向きしか知らないことを痛感し考えさせられました。日本は戦争や紛争がなく平和で安心して暮らすことができるいい国だと思っていましたが、充実した生活を送っている傍ら私たちが生活している九州には難民の方々が収容されている入管施設がありハンガーストライキが行われていることや自由が制限されているなど全くもって知りませんでした。もし、このまま学ぶ機会が無かったら私は一生この問題に寄り添うことは無かったでしょう。国境の狭間で闘っている方が居られること。今突きつけられている問題に対して解決することは容易ではありません。3ヶ月で学んだことは極一部でありまだ私が知らない問題はたくさんあります。これからも学びを続けこの現状を発信していき少しでも解決に近付けれるように努力していきたいと思います。学ぶ機会を与えて頂きありがとうございました。



西南学院高校3年
井手菜々子

国際の狭間に置かれた 人々に寄り添う

心と知

KARDIANOIA

本プロジェクトの第一義的な目的は、「国際の狭間に置かれた人々に寄り添う」ことのできる【心 (KARDIA)】を備えた人間を育成することです。国際法教育では、助けが必要な人を「救う」側の活動に焦点が当てられることが多いですが、そもそも「救われる」側がどのような痛みを味わっているかという倫理的な感覚がなければ本当の意味での救いにはなりません。そこで、本プロジェクトに参加する学生には、まず何よりも「寄り添う」という倫理を基本に据えて勉学に励んでもらいます。

他方で、剥き出しの生の現場に置かれた人々に「寄り添う」ためには、心を尽くすだけでは不十分で、それを現実にするための知恵が必要になります。本プロジェクトでは、入管・外交・戦争・裁判といった様々な場面を模擬的に体験することで、実践的に【知 (DIANOIA)】を獲得することができます。これらの模擬的な取組では、それぞれ国際難民法・国際人権法・国際人道法・国際刑事法といった人間に焦点を当てた国際法の分野を対象とすることから、理論的な学問体系も念頭に置いて勉強を進めることができます。

この理念に共鳴する学生は、学部を問わず勇気を持って本プロジェクトの門を叩いてください。仲間と一緒に心と知を成長させましょう。

プロジェクト責任者 法学部准教授 根岸陽太

プロジェクトの詳細は下記HPに記載してあります。
随時参加メンバーを募集しております。

HP: <https://www.seinan-kardianoia.com/>

・ 講師の先生方の感想

小宮理奈先生からのコメント



異なるバックグラウンドの人々を どう受け入れるのか

私はこれまでタンザニア、ヨルダン、バングラデシュのUNHCR事務所にて難民問題に取り組んできました。

またフランスの首都パリではボランティアとして庇護申請者を受け入れるシェルターにてお手伝いをしました。

人々の生きようとする力や他者を思いやる心、そして異なるバックグラウンドを持つ人々との交流が私の働く原動力になっています。難民問題は、人間として、私たちが異なるバックグラウンドの人々をどう受け入れるのかという問いだと思っており、そのような問いはもちろん日本のコンテキストにおいても投げかけられるべき問いだと思っています。すべての人々が尊重され、バックグラウンドに関わらず尊厳をもって接せられるような社会の創造のため、私はこれらも邁進していく予定です。皆さんとも何らかの形で良い社会の創造のため協働できればと思います。

竹内正宣先生からのコメント



帰国しない、できない被収容者に寄り添って改めて思うこと

大村入国管理センターに収容されている人たちの多くは、来日時点で元々は外国人として在留資格を持っていたが何らかの理由で更新できなかったり、取り消されたり、あるいは難民としての庇護を求めたが在留を認められず、入管法に違反した等として日本からの退去強制令書が発布されたのち、それを拒否して現在に至っています。

この人たちは、生まれ出た国で、経済が疲弊して生活ができない、経済はそこそこでも人としての尊厳が冒されかねない、あるいは民族や宗派間の紛争が絶えない等の事情から、逃れるため、あるいは生きるために期待をもって日本に来たはずです。その彼らを日本の国は、社会は、そして人々は、どのように受け入れ、その期待にどれだけ応えたのでしょうか。たぶんそうではなかったから、その後には刑法違反や入管法違反となる「違反の事実」があったのでしょうか。

この人たちが日本国籍の元に生まれていたら、在留資格の有無は問題にならず、仮に懲役刑でも刑期を終えたら社会復帰していたはずです。面会する私と、被収容者との違いは、被収容者が日本で生まれていないため、あるいは日本で生まれていても日本国籍を持っておらず、「外国人」に当たるからです。人は、生まれ出る国は選べませんし、ほとんどの人は、一生国籍を選ぶことはできません。ポスト国（受け入れ国）の国籍を持っていないということの現実と非情さを面会時に幾度となく痛感します。

立場が逆で私が被収容者であったら、その人の負った過去と、収容されているという状況を私は受け止めることが出来るだろうか、と考えるとき、被収容者の苦悩の一端を知り、その精神力の強さに敬服します。

これからも被収容者おひとりおひとりの人生の一端に触れながら、「現実」の記録を重ね、国籍に関らず、「人」として対応し、「国」の利益・制度もさることながら、同じ「人」としての尊厳をもって、微力ながらその「人」が次に踏み出すことができるようお手伝いしたいと思っています。

根岸陽太先生からのコメント



コロナ禍だからこそ取り組まなければならない課題に立ち向かった学生たち

教員である私の役割は、間接的には社会に貢献することも求められますが、より直接的には学生たちの心に遺産を残すことにあります。その意味で、昨年に引き続き、本年度に教育プログラムに参加した学生たちもみな、人の痛みに思いを寄せられる感受性の高い素晴らしい才能を備えており、教員の指導を素直に受け止めて自分たちの糧としてくれました。

とくに今年度は、新型コロナウイルスが世界中で蔓延し、各国の入国管理に影を落とした一年でした。日本も例外ではなく、従来から過密収容が問題視されてきたなかで、収容施設内での蔓延を防止するための措置が求められました。本プログラムとの関係では、昨年に実施した大村入管センターへの訪問は中止となり、学生たちは現場の緊張感を感じ取ることなく活動することを余儀なくされました。

そのような逆境にもかかわらず、学生たちは立ち止まらず、コロナ禍だからこそ取り組まなければならない課題として立ち向かってくれました。一年間を通じてオンラインで密にコミュニケーションを取り合い、現場で起きている悲痛や苦悩を汲み取ろうと想像力を最大限に発揮していました。その成果を発信する方法にも知恵を用いて、オンラインを通じて西南を超えて地域社会をつないでいました。

この教育プログラムは他者の人生に入り込む極めてセンシティブな内容であるうえ、かりに何かを成し遂げても、お金や賞がもらえたり、自分をもっと知ってもらえたりするわけではありません。反対に、目立とうとして我を出すことが被収容者の人生を左右してしまうことから、ただ「自分を軽くする」ことが学生に求められました。周りを見渡せばキラキラと輝く華やかな世界もあるなかで、それを羨ましく思った時期もあったでしょう。それでもなお、「この美しい世界の片隅で」生きる人々のために地道に取り組み続けた学生を心から誇りに思います。あなたがたの心も言葉にできないほど美しく輝いています。



inspiring you

心と知を紡ぎ、世界へ

 西南学院大学

